

光と音の芸術グループ「ビル・ハム」

桜井孝身 サンフランシスコにて

彼等が一九六七年、サンフランシスコ美術館でやった時、それまで貴婦人、紳士スタイルのすましこんだオープニングが一ヒッピーの群に襲われ、サンフランシスコの上層階級を驚かせ新聞各紙をにぎあわせたが、それ以上に LSD 的爆発的の急激な変化と耳をツンザク音に「これが芸術か」と信奉者たちを驚かせた。

私がビル・ハムと知りあったのは約4年前のことである。全くの無名で彫刻のデッサンを沢山みせてくれたことが印象に残っている。彫刻と並行して光の芸術の実験に余念がなく、近く古びた小さな洋館を改造して映画館みたいなスタジオを作って毎週音楽家、画家、なんとなく芸術を志す友人を集めては「ライト・ショウ」を催して色々の研究をしていた。よくはっきりは知らないが、もうかれ彼がライト・ショウを手がけて10年近くたつのではないかと思う。

私が最初に面白いと思ったのは、そんな山のもの海のものともれないライト・ショウを彼は1ドルの入場料をとって、サンフランシスコのミュージック・センターを自力で借り、二人の共同ライト操者を得、友人の音楽家に音の伴奏をさせた。その1ドルとはいえ、私も若し絵以外をやるなら、例えば九州派主催の「英雄たちの大集会」は参加料が千円であったように、入場料を考えねばならぬと実感していた時、彼のそんな場面にあって仲間を得た喜びはどうしようもなかった。それに彼の仕事はスケールが大きく、すごく私を喜ばせてくれた。それ故、日本から来た人、ニューヨークから帰る人々、皆さそって見せた、中には感心しない人もいたが、それは急に環境の異なる適応の問題だろうと考えている。

そのライト・ショウとは油と水を最初の頃はガラスの板にのせ、鏡で屈折させ幕に写すもので、それを見て音楽家が音を即興的に出すという原理で、至極、簡単であるが大仕掛けだから、そう簡単でないことは、しばらく見ていると判る。この仕事の特徴は剣道みたいなもの、あるいは柔道でもいいが、一試合の投げは最初から予定されてはいない。だから全くの偶然で勝つのであるが、それが力量、練習量と絶対の力が勝れば、必然的に勝つといっても過言でないと同様に、彼等はのちにはプラスチックの大皿など色々のものを使用するようになったが、とにかく投影させる3人も即興的（柔道の投げのように沢して即興的ではない）即ち瞬間的に決定的操作をしていき、同時に音楽家も音を出していく。それが高潮して光の乱舞に熱狂した音が響いて来ると、その中にいる私達はどうしようもない息苦しい気持ちになって来るが、ゆっくりと紋章みたいなものが自転車の車輪を使って投影される形にやっと息づくことが出来る。その色彩と形は宇宙的であり光である関係からも、何処までもすみとおりに、それはあたかも LSD をのんだ状態にひきずりこみ、キンパクした幸福感をさそう。桃色に輝くハート

が瞬間破れたと、ドギリすれば音もなく、またスーッとつながり安心させてくれる。それ等は二度と繰返しがきかなく、また二度と実演出来ない。事実、テレビが眼をつけて何度も上映するが、どうもうまくいかない。

そんな彼等に眼をつけた「ファミリー・ドッグ」という、マネジ・メントグループが最初のダンス会に音楽家と組み合わせてやったのが、いま爆発的人气を呼び、亜流の、安っぽいライト・ショウがハンランする原因となり、すぐにビル・ハムのグループは手を引き、純粹にライトと音の出合いの宇宙に挑戦しようと彼等だけのシャッターライト・サウンドの会場を作って、地味にコッコッとやっている。いまサンフランシスコのヒッピー文化は一番手っ取りばやい音楽と油絵の何百分の一も簡単に出来るポスターと手軽に書ける詩が一応芽ばえ、ヒッピー文化と呼ばれているが、本物は今からである。要するに体力と時間をくう小説、油絵、彫刻、即ち本当の芸術は人が忘れ去ろうとする頃生まれ出るのではないかと思う。